

「カサブランカ」

は、セリフ、音楽、演技、コスチューム、すべてにおいてひとかけらのムダもない、完成度の高い映画です。第二次世界大戦中に、反ナチスのプロパガンダ映画という使命を帯びてつくられた作品でもあります。キャラクターそれぞれが、自分の感情と大義とのほぎまで葛藤しながら、エゴを放棄して世界の幸福のための行動を選ぶ。メロドラマを超えたヒロイズムに、なによりも力づけられます。

現代ではささいな人間関係で傷つく人が多いようで、そのような傷を回避したり癒したりするアドバイスとして「自分の心に正直に」とか「自分を幸せにする努力をしよう」とか「自分がもてはやされているのですが、『カサブランカ』の時代にはそんな生ぬるいことを言っていられなかったんですね。おのれの幸せなど二の次にして大義のために行動したリックが、ラストシーンでイルザに言うセリフがあります。「僕にはやらなきゃいけないことがある。この狂気の世界では、ちっぽけな僕たち3人の問題なんてたいしたことじゃない」。個人の幸せなど犠牲にしても価値のある大義があったというのは、逆説的に、精神の健康にとってはよかつたのかもしれないとさえ思うのです。とはいえ、戦争などまっぴらごめんですけれどね。

登場するキャラクターのなかでは、ハンフリー・ボガート演じる酒場の主人リックがキザをも恐れぬあらゆる意味でのダンディズムで老若男女をしばれさせてきたわけですが、リーダーらしいリーダーが不在の現代においては、ポール・ヘンリーが演じるレジスタンスの指導者、ヴィクター・ラズロの高潔なリーダーぶりが、むしろ光って見えます。妻イルザ（イン

「たかが酒場のワンシーン」に込めし「尊厳」

中野香織文

グリッド・バーグマン」とリックの、自分があずかり知らないところでの関係を察知しながら、問い詰めることも疑うこともせず、ただ、「ぼくのいない間はさぞかし心細かっただろうね」とだけ伝える。そんな良き夫としてのセルフコントロールの深さが光る一方、大義の前では、リーダーとしてセルフコントロールなどいいたしません。

リックの酒場で、ナチスの将校たちがドイツ軍歌、「ラインの守り」を合唱しているシーンがあります。リックのオフィスから出てそれを見たヴィクターは、すぐに楽団に向かい、「ラ・マルセイエーズ（フランス国歌）を！」と指示します。戸惑う楽団員たちはリックを見る。かすかにうなずくリック。ラ・マルセイエーズが演奏され始めると、客は総立ちになり合唱をはじめ、ナチス将校たちの歌をかき消してしまいます。尊敬のまなざしで夫を見るイルザ。ナチス将校とデートしていたイヴォンヌも、涙を流しながら歌い終えると「フランス万歳！」と叫びます。

たかが酒場のワンシーン。しかし、後先をかえりみず發揮されたこのリーダーシップによってドイツの威信が傷つけられたと感じたナチスのシュトラッサー小佐は、酒場の営業停止を命じ、ヴィクターを危険人物として彼に強い圧力をかけるのです。

「命がけで守ります」などと言う男は少なくありませんが、男を判断するには行動を見よ。本当に命をかける男は、「命がけ」なんて死んでも言わない。たかが酒場のエンターテインメントなのに、いや、エンターテインメントであるからこそ、自分の命を危険にさらして「ラ・マルセイエーズを！」と指示した、行動を伴うその一言こそ「命がけ」。ヴィクターがホンモノのリーダーシップを發揮する男であることをま

のあたりにしたリックが、女への愛やらおのれの安全やらを二の次にして、大義のため、この男のために一肌脱ごうと決意するにいたる一言でもあります。

愛する女イルザとその夫ヴィクターをカサブランカから脱出させるために、リックはイルザにも警察署長ルノーにもウソをつくばかりか、自分にもウソをつきます。ラストの飛行場では、こんなことを言います。「イルザは昨夜、私の所へ来ました。通行証を手に入れるために。私を愛しているとまで言いました。でもそれは過ぎたことです。あなたのためにそう言ったのです」。

「わかっていました」とヴィクターは答えます。言葉のままに「わかって」いるわけではもちろんありません。妻の揺らぎ、リックが秘めている妻への思い、自分たち夫婦を気遣うゆえのウソ、そんなこんなをすべてを懐深く理解したうえで、言うのです。「わかっていました」と。アイ・アンダースタンド。これほど深い思いがこめられたリーダーの一言があるでしょうか。ここにおいてふたりの「行動の男」の間に同志としての強い信頼が生まれます。

「闘いへようこそ。あなたが味方になってくれれば、われわれは勝ちます」。ナチス占領下にあったフランスを応援し、アメリカの参戦を是認するプロパガンダとしてのセリフであったことを差し引いたとしても、このヒロイズムには酔わされません。それにしても、こんな傑作を戦時に作る余裕があった国と戦争したんですね、日本は。

ヒロイズムにどっぷりひたるのは虚構の中だけで十分、現実世界のヒロイズムにははぐれぐれも用心しなくてはね。

なかのこぼり

東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て、文筆家。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。過去2000年分のファッション史から最新モードまで幅広い視野から研究、執筆、レクチャーを行う。最新刊は監訳『シャネル、革命の秘密』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）